

新聞記事に親しみ、自分の興味関心に合わせて進んで活用しようとする子

神戸市立若草小学校 校長 徳山 浩一

教諭 塩口 雄大

1. 児童の実態

5年生で実践取組をするにあたり、ニュースに対する児童の実態や興味関心を把握するために、事前アンケート（11月）を実施した。

【ニュースについてのアンケート調査より】 調査対象：5年生57名

調査項目	回答項目	事前（人）	事後（人）
①ニュースを何で知るか 《複数回答あり》	① 新聞	8	20
	② テレビ	56	54
	③ ラジオ	2	3
	④ パソコン（インターネット）	6	7
	⑤ スマホ・携帯	26	37
	⑥ 家の人に聞く	32	35
	⑦ 友達に聞く	12	14
②新聞を読んでいるか	① 毎日読む	1	0
	② 1週間に3～4回読む	1	1
	③ 1週間に1～2回読む	4	12
	④ たまに（1カ月に何回か）読む	14	15
	⑤ ほとんど読まない	4	6
	⑥ まったく読まない	10	4
	⑦ 新聞をとっていない	23	23
③どんな記事を読んでいるか 《複数回答あり》	① 読まないから分からない	33	20
	② テレビらん	16	17
	③ ニュース記事	14	25
	④ 天気予報	7	12
	⑤ スポーツ	12	22
	⑥ その他（4コマ漫画 など）	6	5

5年生児童の約40パーセントにあたる23名の家庭で、「新聞をとっていない」という実態が明らかになった。パソコンやスマートフォンでニュースを知るという近年の社会情勢に加え、本校の家庭生活背景が、子供たちが新聞に触れる機会が少ないことに大きく影響していることが分かった。新聞をとっている家庭の児童でも、ほとんど新聞を読んでいないことが分かった。神戸市学力定着度調査（5年）や全国学力・学習状況調査（6年）の質問紙調査の結果からも、「ふだん新聞を読む」と回答する児童が少なかった。

2. 具体的な取組

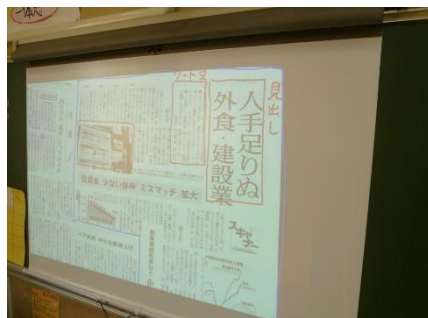
ふだんの家庭生活や学校生活で、「新聞を読む習慣がない」「新聞を読む時間や場所がない」「新聞をとっていない家庭がある」「新聞を読む力（語彙力・漢字力・読解力）が育っていない」「世間の出来事にあまり興味がない」などという本校児童の実態を全職員で共通理解した。その上で、「児童が新聞の活字に親しみ、身の回りのニュースに興味をもって進んで新聞記事を読もうとする態度を身に付ける」ことを今回のねらいの中心にした。

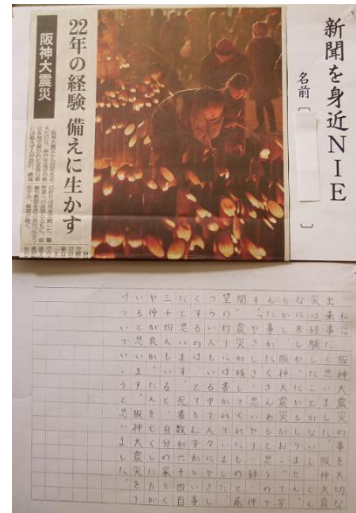
提供される6社の新聞を5年学習室に常設することに加えて、学校に届く「子ども新聞」等を図書室に掲示するなどして、日常的に新聞に触れることができるようにした。



具体的には、5年生が1学期の国語「新聞を読もう」で取り組んだことを基に取組を進めた。まず、本校児童の活字に対する興味や語彙力の実態から考えて、記事全てを読むことは難しいと考えられたため、新聞記事のリード文や見出しを基に、お気に入り記事を見つけさせた。そのお気に入り記事を切り取ってワークシートに貼り付け、感想や選んだわけをまとめるようにさせた。

初めは新聞紙面の情報量の多さに抵抗を感じている児童もいたが、リード文や見出しの中のプラスイメージの漢字（進・喜・改など）とマイナスイメージの漢字（悪・苦・死など）に着目させることで、記事のおよその内容を想像させるようにした。





活動を2・3回繰り返すうちに慣れてきて、自分が選んだ記事を友達と見せ合ったり、意味が分からない言葉について国語辞典や漢字辞典で調べたりする姿も見られるようになった。

3. 新聞記者派遣授業

実際に新聞社で働く方を講師に招いて、新聞を作る上での工夫や苦労について、生の声を聞いたり、資料映像を見せてもらったりした。「記事を書くときに気を付けていることは何ですか。」「どんなふうに毎日、記事をさがすのですか。」など、子供たちの素朴な疑問にも懇切丁寧に答えてもらった。



5年生は社会科「わたしたちの暮らしと情報」の学習を進めているので、具体的な仕事の様子を教えてもらって、興味津々で聞いていた。「新聞を毎朝・毎夕届けるために働いているのは本当に大変だ。」「新聞記者の方はいつも世の中の人に貴重な情報をすぐに発信していてすごい。」という感想をもっていた。

4. 成果と課題

1年間、取組を進める中でわずかではあるが、成果も表れてきた。先に挙げた「ニュースに対するアンケート」を、事後アンケート（3月）として再度実施した。

その中で、「ニュースを何で知りますか」という質問に、「新聞」と答えた児童が8名から20名と大きく増えた。「新聞をまったく読まない」と回答する児童も減り、「1週間に1～2回読む」という児童が少し多くなった。さらに、「どんな記事を読んでいますか」という質問に、「ニュース記事」と答える児童が倍増した。今回の取組の中で一面記事を中心

に新聞を読んだことが、子供たちの意識を少し高めたと言える。活字離れが叫ばれ、新聞をとっていない家庭も多い中で、子供たちにとって、新聞は身近な存在とは言い難い。今回のように新聞に興味をもたせる活動を仕組むことは、非常に有益である。

本校は、市から「ICT活用重点推進校」の指定も受けている。各自が興味をもった新聞記事を写真データとしてタブレット端末に取り込んだり、互いの意見や感想を発信・交流したりと、「情報活用」の観点から、相乗効果のある実践を2年目に積み重ねたい。

今回の取組は、地域の方や保護者にもたいへん好評であった。学校評議員会でも、「子供たちが活字に触れる機会は大切である。」「子供たち自身が学習のふり返りを新聞形式にうまくまとめて教室に掲示しているが、こういう力は今後さらに必要である。」などとほめてもらった。

課題としては、取組の内容面をさらに工夫していくことが挙げられる。1年目の今年度は、12月から1月の2か月間に毎日、6社の新聞提供を受けた。活動時に、子供たち一人一人の手元に1紙が行き渡るという面ではよかったが、取組が短期集中型になったことは否めない。また、子供たちの活動とは直接関係がないが、一日に6紙の配達を受け入れることは、土日のことを考えると新聞受けの設備面でも無理があった。先の学校評議員会でも、「今回は、1面記事を中心に読んでまとめたようだが、同じ新聞の中で、1面と家庭面を読み比べてもおもしろい。きっと使われている漢字の量に違いがあることにも気づくはずだ。」というご意見もあった。来年度の取組にぜひ取り入れてみたいと考えている。

5. 事後アンケートの子供の感想より

- 前まで新聞を読むのがきらいだったけれど、新聞の読み方を知って楽しくなった。
- 最初は新聞をあまり読まなかったけれど、おばあちゃんの家には新聞があるから、少しずつ読むようになりました。
- 新聞はたくさんの情報を早く知れて、とても便利だと思う。
- 新聞はテレビでは分からない細かいところまで詳しく知れて、すごく分かりやすい。
- 新聞は字がたくさんあるから嫌いだけれど、リード文とかだけでも読んでみようと思いました。
- 新聞はリード文や見出しの字の大きさなどを考えて分かりやすいように作っているの
で、週に1回ぐらいは読んでみたい。
- 新聞を読者に分かりやすく作るにはとても手間がかかることが分かりました。
- 新聞の一つ一つの記事に何人もの人がかかわっていて、読者のために大変な仕事を素早く丁寧に気持ちを込めてしていることがわかって、読む気になった。